

まだいた木訥の仁

「日曜寸言」

050206

芭蕉は、『奥の細道』の旅
 の途次、元禄2年4月1日(原
 文では3月卅日とあるが誤り)、
 東照宮参拝を直前にして日光
 山麓の旅籠に宿泊する。そこ
 の主の名は「仏五左衛門」。よ
 るず正直を旨とするので、人
 は私のことをこう呼ぶが、一
 夜の草枕、ゆつたりと休んで
 くれ。」などと言っているので、
 な「仏」がこの汚濁した娑婆
 に出現したのかと、彼をつぶ
 さに観察した。その結果、あ
 るじのなす事に心をとどめて
 みるに、唯無智無分別にして
 正直偏固の者也」ということ
 になつた。ここに、「無智」だ
 の「無分別」だのというから、
 現代語でこれを解するといこ
 の家の主人は唯のバカという
 に等しい。だが、それは違う。
 ここにいこう、「無智無分別」と
 は、ここでいう「無智無分別」
 は、ついでに「無智無分別」だ
 わつて行動するのまはなく、
 あくまでも自然のまはなく、
 の無言動をするのまはなく、
 のほめ言葉の左衛門のまはな
 一旅行は、五左衛門のまはな
 須の旅の疲れを癒し、進めた
 須の黒羽へと歩を進めた。那
 ある。羽へと歩を進めた。那
 自宅を建てて30年。この
 家で両親の死を看取り、三
 の男子を育てたもの、多忙
 にかまけて何となく、多忙
 しない。今日まで、大改修
 入った予定を機に、大改修

着手した。切開してみると、
 家主と同様、昨年温かい
 ない。好天にも恵まれて、
 え、改装工事、いながら、
 工に左官、電気、水道、大
 内装、屋根、器具、外壁工
 と、職人仕事はひとおり、
 新築工事と何ら変わらない。
 棟梁のKさんの人柄の良さで、
 集まった職人集団20余人に
 よる事がなされ、その結果、
 仕事が満足した。中でも、
 大いに満足した。中でも、
 と、仁に際した。剛木訥記
 の「仁」がいた。剛木訥記
 し、彼ら三人は、県の南端の町
 から、まだ外装工事。30
 くる。風雨にさらされた外壁の
 年、汚濁状態など、ひび割れ、
 汚濁状態など、ひび割れ、
 まじり、壁は、赤サビに侵
 はれ、壁は、赤サビに侵
 さ裂け、壁は、赤サビに侵
 はれ、壁は、赤サビに侵
 届けて、大工の棟梁経由
 で、届けて、大工の棟梁経由
 通り、一軒の外壁工事が、
 ンキ屋さん、一日と冬型
 に、変わつて、寒さの中を、朝
 は、朝星、夜は、夜星、唯々
 仕事に励む。見積り書通り
 な事を、とく、終つて、倍
 の事を、とく、終つて、倍
 の事を、とく、終つて、倍
 の事を、とく、終つて、倍
 見、驚かす。この非打ち
 所、驚かす。この非打ち
 所、驚かす。この非打ち
 所、驚かす。この非打ち
 実、驚かす。この非打ち
 国、驚かす。この非打ち
 門、驚かす。この非打ち
 し、驚かす。この非打ち